

シンポジウム

「人が人らしく生きる」を当たり前実践するには？
—清拭のわざが継承される組織のエスノグラフィー—

How to Practice Taking it for Granted that People Live as Humans?:
An Ethnography of Organizations that Transmit Bedbath Skills

澁谷 幸 Miyuki Shibutani (神戸市立看護大学)

キーワード：清拭，エスノグラフィー，組織文化，学習する組織

key words : bedbath skills, ethnography, organizational culture, learning organization

I. はじめに

医療の高度化，疾病構造の変化，さらには医療法の改正等に伴う在院日数の短縮化などによって医療現場は大きく変化し，看護師が患者の療養生活に関わる機会の減少を招いている。療養生活援助の核となる実践として，看護師は清拭を重視してきた。看護師にとって清拭は，患者に安楽を提供するという専門性の具現とも言える。この「安楽の提供」という看護実践が，看護師の手から離れつつあることが危惧される。

本稿では，このような現状の中，看護師による清拭を大切にし，その技術を後輩に継承している看護師達を紹介したい。彼らの実践から，看護師が「当たり前のこと」を実践し続けるために，今何が必要であるかについて考察する。

II. 清潔ケアの現状から見える看護の危機

看護師と看護補助者の業務分担に関する調査（中岡・富澤・三谷他，2017）では，清拭を看護師から看護補助者の業務へと移譲する傾向が示されている。入浴介助，清拭，足浴の清潔援助3項目について，現在の主な実施者を「看護師のみ」「主に看護師」としている割合は，3割から半分程度である。しかし，今後の実施者を看護師としている割合は1割程度に低下し，「看護師と看護補助者」とする割合，「主に補助者」「補助者のみ」とする割合は共に増加している。特に，

清拭は，「主に補助者」としている割合は，1.7%から，10.1%に増加している。本調査の結果は，清拭が，看護補助者に委ねられつつあることを示唆しており，療養生活の安寧を守るという看護師の役割の希薄化が危惧される。

III. 「清拭しないで看護したとは言えない」という看護師達の実践

この病棟は，ごく一般的な消化器外科と緩和ケアの混合病棟である。この病棟の看護師は，人の当たり前前の日常生活の一部として，清拭を大切にしていた。彼らは，術後3日間は必ず看護師が清拭すること，術後患者や重症患者は看護師2名で清拭することというルールを作り，これを確実に実行するために，「業務調整ボード」による業務調整を毎朝行っていた。この業務調整ボードの活用によって，清拭は，必要な患者に必ず毎日実施されていた。しかし，それだけでなく，看護師達が「毎日清拭するのは当たり前」と考えるようになっていた。そして，患者の普段通りの生活である入浴と同じ効果を生み出す清拭を実践していた。また，看護補助者に協力してもらうことはあっても，それが続くと「最近看護してないなと思う」「自分で清拭したかどうかは，看護専門職としてこんな仕事をしたいと思うように行動したのかどうかだ」と述べていた。つまり，この病棟では「清拭しないで看護したとは言えない」という認識が看護師達で共有され

ていると言えた。

IV. 学び合う組織文化の中で共創される 看護の価値観

本病棟の若手看護師達は、病棟での実践を重ねるうちに清拭が患者にとって意味のあるケアだと考えるようになっていた。それは、「重症患者は看護師2人で清拭する」というルールがあることで、先輩看護師と一緒に清拭する機会が多く、先輩から清拭の技術とともに、患者にとっての意味を学んでいたからである。しかし、清拭以外の場面においても、彼らは、患者に関心を寄せる「心」を育て合っていた。例えば、新人看護師の不適切な実践は、看護師達の休憩室での笑いのネタになる。しかし、ネタになった新人看護師は「当たり前のこと言われているだけで、むしろありがたい。看護を教えてもらっている」と言う。さらに、先輩看護師も「変なことしていたら笑われる風土がある」と言う。つまり、不適切さを上手に指摘し合う関係が築かれ、互いに学び合い成長できる組織が形成されているのだと思われた。

このような学び合う関係性の中で、患者がその人らしく一日を過ごすことを大切にする気持ちや、「患者の安寧を守るのは私達だ」という信念が形成され、人が人らしく生きることを大切にする看護が病棟の価値

観として共創されているものと思われる。このような価値観の存在が、清拭に限らず様々な場面で、患者にとっての当たり前を看護師として当たり前に実践することを可能にしているのだと思われた。

V. おわりに

現在の看護実践現場には、新しいシステムや物品が次々に提案されている。それらをいち早く導入することが、革新と言えるだろうか。社会が変化しても、患者が療養生活で望むことは、今日一日を安寧に過ごすことである。それを保障するのは看護師であり、そのためには、看護師がもつ優れたケアの技術が必要である。それを手放さない、見失わないこと、そして、看護師が『ケアすること』に専念できる組織であることが必要である。このような組織を生み出すアイデアが革新されることを願う。

文献

中岡亜希子・富澤理恵・三谷理恵・澁谷 幸 (2017). 急性期病院における看護師・看護補助者のより良い協働システム構築をめざす基礎的研究—看護師と看護補助者を対象とした実態調査より—, 日本学術振興会科学研究実績報告書.